

敗北絶望凌辱ダンジョン

〽魔物に犯される新米冒険者〽

とある大陸の北方には樹海が広がっていた。ある日、大きな地震が発生し、その樹海の真ん中にぽっかりと穴が開いた。穴の奥には広大な空間が広がり、更に地下へと道が続いていた。そして、地下からは次から次へと魔物が現れた。

大陸を支配する王国はこの穴の周りを兵で固め、魔物の侵攻を食い止めた。しかし、王国軍の兵士たちだけでは魔物を抑え込むのが精一杯で、地下の調査を行うだけの余力はなかった。そこで国王は、この穴の底を調べた者に報酬を出すことにした。見事この地下の謎を解いた者には、貴族の地位を与えるとまで約束した。

その結果、大陸全土から腕に覚えのある冒険者たちが押し寄せた。樹海に空いた穴はいつしかダンジョンと呼ばれ、その周囲には冒険者たちのための店や宿が開き、立派な街となった。

今日もまた、命知らずの冒険者がこの街を訪れる。ある者は地下深くに眠るといふ財宝の噂を求めて、ある者はまだ見ぬ強敵と戦うために、ある者は貴族の階級を狙って。彼らは先を争うように次から次へとダンジョンへ潜っていく。その奥に何があるかを知らぬま

リコは、鬱蒼と茂る木々の合間を歩いていった。地面はぬかるみ、張り巡った木の根がでこぼこと盛り上がり、歩きにくいことこの上ない。額からは汗が流れ落ち、息も上がってきていた。腰に下げた剣や盾の重さが、容赦なく体力を奪っていく。女の身体では厳しい道のりだったが、冒険者になった以上、性別を言い訳には出来ない。なにより、自分たちを率いている隊長もまた、女性なのだ。リコは気合を入れなおすと、前に行く隊員たちに後れを取らないよう、必死に足を動かした。

ここはダンジョンの中。地下三階に位置する場所。不可思議なダンジョン内の空間は、地下だというのに木々が繁っている。確認されている限り、地下五階分まで地面が層のように連なっているのだ。おそらくだが、それより下も同じような構造になっているのだろう。それがどこまで続いているのか、どうしてこんな地形になったのか、誰も知らないし想像もつかない。

天井で光る鉱石が昼夜問わずダンジョンを照らしているが、太陽が見えないため時間間隔もあやふやになる。ダンジョンに入ったのは日が昇りきった頃だったが、今が何時なの

か、夕方なのか夜なのかもわからない。

そんな状態で歩いていけると、隊を先導していた若い女性の隊長が振り返って言った。

「そろそろ休憩にしよう、悪いがケインは見張りをしてくれ。後で私と交代しよう」

リコ以外の隊員三人は小さく頷く。ケインは槍を担いで少し離れた場所へと向かい、残りの二人は思い思いの場所に腰を下ろす。リコもそれに倣い、適当な樹の根本に体を預ける。一度腰を下ろすと、どっと疲労が襲ってきた。背負っていたリュックから水筒を取り出し、冷えた水で喉を潤すと、ようやく気分が楽になった。

「リコ、大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です、ありがとうございます、リーダー」

「リーダーだなんて、イルマで良いよ」

先ほどまで隊を先導してきた女性が、リコの隣に腰を下ろす。腰に下げていた長剣も、今は外して地面の上に置いている。だが、敵が近づいてくればすぐさま剣を引き抜いて戦闘態勢に移れるように備えていた。

「……すごいですね、イルマさんは」

「え？ いきなりどうしたの？」

「私と同じで女の人なのに、誰よりも強いし、隊長だし、私みたいなのを気にかけてくれるし……」

「そんな、私はただ、ちよつと経験が多いだけだよ」

「それでも、すごいです……」

リコは素直な気持ちでそう言った。自分のような新米の冒険者を隊に入れてくれたばかりか、何かと面倒を見てくれている。リコはイルマに頭が上がらなかつた。

「なあ、リコ」

イルマが、少し躊躇つたようにしたあと、口を開いた。リコはその様子で、何を聞かれるかがわかつていた。

「どうして私が冒険者になつたか、ですか？」

「……詮索しようつていうんじゃない。気分を害したなら謝らせてくれ。ただ、隊長として、聞いておきたかつたんだ」

冒険者には、過去に傷がある者も多い。罪を犯し、まともな生活を送れなかつた者が、貴族の特権目当てに冒険者になることはよくあることなのだ。だから、ただの田舎娘にしか見えない自分のような人間が、どういう目で見られているか、リコは理解していた。

自分は背も低いし、戦いだって得意じゃない。国が運営している冒険者育成プログラムに参加した程度だ。どうして冒険者になりたいと思ったのか、気になるのは当然だ。そして、それを聞かないままに自分を隊に引き入れてくれたイルマには、正直に話すべきだとも思った。

「私の父は、酒に溺れて人を殺したんです」

「……」

イルマは、黙って聞いていた。

「そのせいで、母と私と弟は白い目で見られました。母は身体を壊して、私も、地元では働けなくなりました。弟も、石を投げられました。だから、冒険者になるしか、なかったんです」

ぽつりぽつりとリコは語る。リコ自身にも、悲壮感はない。とつくに心の整理はつけ、納得している。

「冒険者として魔物を倒せば、お金が貰えるし、もしかしたら貴族にもなれるかもしれない。そしたら、母にも弟にも、楽をさせてあげられる。だから、です。全部自分たちのため、国を守ろうとか、魔物の被害を防ごうとか、そういうんじゃないんです。だから、

ちよつと申し訳なくて……」

それでも、ふと思う。自分は浅ましい人間なのではないか、と。王国軍の人たちは使命感に燃えてここにいる。そんな中で、自分は自分のためだけに戦っている。

「イルマさんは、もともと国王軍に所属していたんですよね？」

「ん？ ああ……」

聞くとイルマは、少しばつが悪そうに頬を掻いた。

「すごいです。誰かを助けるために戦うって。私は、いつも自分のことばかり考えてます」

イルマのような立派な人間と、同じ場所に立っているのが情けなくなってくる。そんな資格はないのではないか。リコは自分を責めた。

「そんな立派なもんじゃないよ」

イルマはぼつりと呟く。リコは顔を上げ、イルマをじつと見つめた。

「確かに国王軍の兵士だったけど、どうにも堅苦しいのが苦手です。防衛ばかりっていうのも性に合わなかったし、我儘言つて辞めたんだよね。今はただの、気ままな冒険者だよ」

そこまで言って、イルマはふっと息を吐いた。その顔には自嘲気味な笑みが浮かんでい
る。

「国を守るって使命を投げ出して、好き勝手やってるだけだよ」

「そんなことはありません」

リコは思わず、イルマの言葉を否定した。

「イルマさんは、ダンジョンの地下深くで魔物をやっつけて、地上への被害を減らしてい
ます。立派に街や王国を守ってると思います。街のみんなも、そう言っていました」

リコの言葉に、イルマは目を丸くした。そして、今度は素直な笑みを浮かべた。

「ありがとう、そう言ってもらえると、嬉しいよ」

それからしばらく、静かに時を過ごした。時折、水筒に口を付ける。ダンジョンの中は
静かだった。風もほとんどなく、木々がざわめく音も聞こえない。虫の声も、鳥の声も聞
こえない。ここは本当に、魔物が跋扈するダンジョンの中なのだろうか、リコは不思議
に思った。

「けど、それを言うなら、リコだって立派だよ」

「……え？」

「自分一人のためじゃなくて、家族のために冒険者になったんだろう？ それはずいこ
とだよ」

何を言われたのか、リコには咄嗟に理解できなかった。イルマは、にこりと笑って、言
葉を続ける。

「リコは十分立派だよ。誰かのために、辛い選択を選べるんだ。私は、すごいことだと思
うな」

リコは思わず俯いた。顔は真っ赤になっていた。イルマのような人に、褒めてもらえた、
認めてもらった。そのことが、たまらなく、嬉しかった。

「あ、ありがとう、ごさいます——」

そう答えた、その時だった。微かに、ガサガサと茂みが揺れる音がした。

「っ——!」

イルマの動きは早かった。手元に置いた両手剣を手に取り、さっと立ち上がると臨戦態
勢を取る。休んでいた他の二人の隊員も同様だった。リコは突然の出来事に驚きながらも、
一歩遅れながら剣を抜き、構える。

「ケイン、どう?」

「音は遠い、が、近づいてきている。おそらく、一匹だ」

槍を構える大男、ケインが静かに呟いた。その言葉の通り、ガサガサという音は少しずつこちらに近づいてきて、徐々に大きくなっていく。

「アズマ、デイン、左右に展開。逃げ道を塞いで」

了解、と答え、二人の男が左右に広がる。アズマは大斧を、デインは棍棒を構え、魔物がいると思しき方向を凝視する。

「うう……」

リコはつい声を漏らした。ダンジョンに潜ったのは三回目だし、魔物と戦うのは五回目だ。だが、まだ慣れることはない。みんなのように堂々と武器を構えて待ち構えることは出来ず、イルマの後ろで剣を持ったまま震えることしか出来ない。そんな自分が心底情けないと思った。お金のため、家族のために戦うと息巻いておきながら、なんて無様な姿だろう。

「大丈夫、落ち着いて」

イルマが、正面を見据えたままリコに声をかける。とてもその言葉は、リコにはとても力強いものを感じられた。

「あなたは強いわ。もっと自信をもって。失敗しても大丈夫よ。だって、私たちがついてくるもの」

リコの震えは、いつの間にか収まっていた。リコは、一つ大きな深呼吸をすると、剣を真っ直ぐ構えなおす。その瞳にもう、怯えはない。

「来るぞ！」

先頭に立つケインが叫ぶと同時に、草むらの中から何かか勢いよく飛び出してくる。それはイノシシの姿をした魔物だった。茶色の毛に覆われた、普通のイノシシよりも一回り巨大な魔物。鋭く尖った牙を振り回しながら、猛烈な勢いで駆けてくる。額に開いた三つ目の瞳が、真っ直ぐケインを捕えた。

「うおおっ！」

ケインは紙一重でイノシシの突撃を躲す。その際、すれ違いざまにイノシシの脇腹に槍を思いきり突き立てた。

耳をつんざくような声でイノシシが叫ぶ。だが、その勢いは止まらない。腹に槍が刺さったまま、真っ直ぐに突き進んでくる。その先にはイルマと、リコがいた。

「いっっっ！」

イルマが鋭く叫ぶ。猛烈な勢いで迫るイノシシに怯むことなく、堂々と待ち構える。イノシシは止まらない。その牙がイルマの身体を貫こうとする、その一瞬、イルマの身体がひらりと踊る。

「はああっ！」

一閃、イルマがすれ違いざまにイノシシの身体を薙いだ。剛毛に覆われた皮膚が裂け、血が周囲に飛び散る。イノシシは断末魔の叫びを上げ、勢いを弱めたが、まだ歩みと止めない。槍を突き立てられ、半身を切り裂かれてもなお、魔物はその強靱な生命力で突撃を続ける。

「リコっ！ トドメだっ！」

「っ……はいっ！」

リコは魔物に向かって一歩踏み出した。大分弱っているとはいえ、あの牙の餌食になればひとたまりもない。だが、リコに恐怖はない。恐怖を感じる暇もないほど、目の前の魔物に集中していた。

「すう——はあっ！」

呼吸をとめ、流れるような動きで剣を振るう。下段に構え直した剣の切っ先で、イノシ

シの首を掬い取るように切り裂いた。その流れに身を任せるように斜め前に飛び出し、イノシシの牙を躲す。

イノシシは、首から大量の血を垂れ流しながらも、しばらく歩き続けた。そして、木の幹に額をぶつけると、ゆっくりと地面に倒れる。どさり、と音がして、それからしばらくは無音だった。そして、ぴくりとも動かない魔物の死を確信したところで、皆が一斉に息を吐く。

「はあっー、なんとかなったな」

ケインが魔物の身体から槍を引き抜きながら笑った。左右で張っていたアズマとデインが笑顔を返す。

「俺らの出番も残しておいてほしかったぜ」

「次は俺が先頭に立つからな」

軽口を叩き合う男たちを背に、イルマはリコの肩を叩いた。

「やったなりこ！ 魔物にトドメを刺したぞ！」

「は、はい……」

「どうした？ 元気がないな？」

「い、いえ、その、なんだか、緊張が解けて、気が抜けちゃって……」

リコは自分が倒した魔物をまじまじと見つめた。あの大きくて凶暴なイノシシに、自分がとどめをさした。そのことがなんだか、信じられなかった。もちろん、ケインとイルマが弱らせてくれたからこそでもある。イルマなら、すれ違いざまの攻撃でとどめを刺すこともできただろう。リコのためにその機会を譲ってくれたのだ。そのことはリコ自身理解している。だが、それらのお膳立てがあつたとしても、自分自身の手で魔物を倒した、倒せたということが、驚きだった。

「言つただろ、リコは強いんだって、な？」

「は、はいっ！」

心の底から、少しずつ喜びの感情が湧いてくる。ようやく自分も、一端の冒険者になれたような、そんな気がした。

「それにしても、三つ目イノシシが地下三階にいるとは珍しい」

リコの成長を見届けたイルマは、一転して真剣な表情で魔物の死体に向き合う。三人の男たちも、周囲の警戒を続けながら魔物の近くへと寄ってくる。

「そうだなあ、地下五階にいるような連中だぜ？」

「地下四階になら迷い込んだ个体を見たことがあるが、三階で見たのは初めてだ」

「魔物の数が増えてきた兆候かもしれないな、警戒したほうが良い」

それぞれ思い思いの見解を述べる。経験の浅いリコはその会話には混じれないが、今後の糧とするために彼らの言葉にじつと耳を傾けていた。

「ん？ これは……」

魔物の死体を漁っていたイルマが何かに気づいた。自分が切り裂いた傷口に手を当て、死体の皮膚を弄る。

「どうした、イルマ」

「こいつ、私たちと戦う前から怪我を負っていた」

「何？」

男たちがイルマの周りを囲む。リコもそれに倣い、イルマの手元を覗き込んだ。確かに、剣によるするどい切り傷の他に、何かに引き裂かれたような傷がある。

「よく見れば牙も一本折れている。既に深手を負っていたか」

「どうりで、妙に突っ込んでくると思ったぜ。最初から興奮状態だったんだな」

「別の冒険者とやりあってたのか？」

「……いや、これは——」

イルマが言葉を続けようとした、その時だった。木々を震わせるような轟音が、どこからともなく響き渡る。リコは思わず耳を塞いだ。それほどまでの爆音だった。それは、獣の叫び声のようにも聞こえたが、リコの知る限り、あんな叫びを上げる獣も魔物も存在しない。

「な、なに……?」

リコは慌てて周囲を見渡す。見える範囲には何も無い。だが、木々の向こう。暗い影の中に、何かの気配を感じた。先ほどイノシシが飛び出してきた方向に、何かいる。それも、巨大な何かが——

「別の魔物だっ！ たぶんこのイノシシをやった奴だ！」

イルマが叫び、剣を構える。男たちも同様に自分の武器を構えた。

「あんな叫び声聞いたことねえぞ……」

「いったいどんな奴なんだ……?」

「お前らビビんなっ！ おいつ、今度は俺が先頭に出るぞっ！」

そう言って前に出たのは斧使いのアズマだ。筋肉を盛り上げ、いつでも斧を全力で振る

えるように構える。どんな魔物が出てこようと、その頭をかち割ってやる。そんな気概がその背中から感じられた。

「リコ、だい——」

「大丈夫ですつ、さつきみたいに、やれます！」

イルマの言葉を遮って、リコは力強く言い切った。正直、怖い。本能が、木々の向こうにいる何かを恐れている。だけど、負けない。勇気と力でそれを乗り越えるのが、冒険者なのだから。リコはそう自分に言い聞かせた。

リコの視線の先で、木々が揺れた。バキバキと音をたて、太い幹が押し折れていく。木を薙ぎ倒すような魔物なんて、噂でしか聞いたことがない。尾ひれのついた噂だと思っていた。それが、すぐそこにまで迫っている。

そして、ついに、数多の木々を薙ぎ倒し、それは姿を現した。

「な、なんだこいつ……」

ディンが思わず呟いた。先頭で斧を構えていたアズマは、呆気にとられたように頭上を見上げている。そう、それは巨漢のアズマが見上げるほどに巨大な魔物だった。

一言で特徴を表すなら、猿だ。それも、人間の倍ほども大きな。真っ黒な毛に覆われた

肉体は分厚い筋肉に覆われていて、それはやたらと長い腕も同様だった。大きな掌で木の幹を掴むと、そのまま押し折ってしまうほど、恐ろしい怪力の持ち主だ。

その猿の魔物が、眼下に並ぶリコたちを視界にいれた。リコは、魔物と目が合った。魔物が、人に似た顔にニヤリと笑みを浮かべる。その口の間に見える歯は、血かなにかで赤黒く染まっていた。リコは、自分の中の勇気がみるみるしぼんでいくのを感じていた。

そしてそれは、他の隊員もまた同様だった。デインは一步後ずさり、ケインは唾を飲んだ。そして、アズマはただただ魔物を見上げていた。

「こっつ、こいつつ！」

アズマは恐怖を打ち払うように叫ぶと、斧を思いっきり振りかぶった。頭蓋には届かないが、足を断ち切れれば地に伏させることが出来る。アズマは猿の足首に狙いをつけると、思い切り駆け寄った。

「えっ——」

と声を上げる間もなく、アズマの身体が宙に浮く。そのまま勢いよく吹っ飛び、木の幹に激突して静かになった。一瞬の出来事で、リコはアズマの身体を目で追う事すら出来なかった。

「あ……」

リコは見た。木の幹を盛大にへこませて、首をありえない方向に曲げて死んでいるアズマの姿を。死んだ。一瞬で。隊員が、仲間が、冒険者が、死んだ。

アズマの手から離れた斧が、くるくると回転しながら落ちてきて、地面に突き刺さる。それが合図だったかのように、デインが叫んだ。

「よくもアズマをおおっ！」

「待てっ、デイン！ 落ち着けっ！」

イルマの言葉は激高したデインには届かない。デインは棍棒を振りかぶりながら魔物へと向かっていき、そして……その腕に捕えられた。

「がっ——」

魔物の巨大な掌が、木の幹さえも平然と押し折る掌が、デインの全身を握りこむ。みしみしと骨がきしむ音が聞こえた。デインは声にならない悲鳴を上げている。胸が圧迫され、上手く呼吸が出来ないようだった。

「デインを離せえっ！」

飛び込んだケインが、デインを掴む腕に深々と槍を突き立てた、ように見えた。だが、

槍の矛先が少しだけ皮膚に喰いこんだだけだった。それほどまでに、魔物の皮膚は固かった。

「馬鹿なっ——」

その言葉が最後だった。魔物が無造作に振るった腕が、ケインを森の中へと弾き飛ばす。魔物の腕に刺さった槍が、ぼろりと地面に落ちた。

「あ……ああ……」

リコは茫然と、その光景を眺めていた。頼りになる仲間たちが、一瞬で蹴散らされてしまった。剣を持つ手が、震えはじめた。

「がつ、ぐっ……はな、せ……」

魔物に掴まれたデインが、息も絶え絶えに呟く。魔物にはやりと笑うと、口を大きく開けた。そして、デインに頭から噛り付いた。ぶちりと、肉が千切れる音がして、デインの上半身が魔物の口の中に消える。くちやくちやと肉を咀嚼する音、ばりばりと骨を噛み砕く音がリコの鼓膜を震わせる。

「リコ……逃げて……」

イルマが小さな声で、しかしハッキリと、リコに告げた。その背中では、震えてはいなか

った。

「あいつはヤバイ。これ以上被害を広げるわけにはいかない。街のみんなに知らせる。そのため逃げて」

「い、イルマさん、は……」

「私はここで時間を稼ぐ。逃げに徹していれば、そうそう負けない」

だから大丈夫、とイルマは答えた。大丈夫。イルマのこの言葉に、何度も救われてきた。

魔物が、デインの残った半身を飲み込んだ。そしてその虚ろな瞳を、イルマたちのほうへと向け、牙を剥いた。

「逃げてッ！」

体験版は以上となります。

続きは是非、製品班をお求めください。

なお、本編は全四十三ページとなります。

サークル 「イオ・リバーサイド」

著 イオ

発行日 二〇一七年 六月 十七日

ツイッターアカウント

https://twitter.com/io_riverside

ピクシブアカウント

<https://www.pixiv.net/member.php?id=14764410>

本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。